

## シンポジウム「医療と文化」

## 趣旨説明

町 泉寿郎

二松学舎大学

医療が人体・生命現象を対象とする自然科学であると同時に、身体観・死生観や医療習慣等が各地域各時代の文化的影響を被ることは本学会員諸人には今更言を要さないが、本大会のテーマとして「医療と文化—文化的継承・異文化理解—」を掲げ、また本シンポジウムのテーマとして「医療と文化」を選んだ趣旨を簡単に説明しておきたい。

2019年10月に武田科学振興財団杏雨書屋の第71回特別展示会「医家の詩文と書画」を開催し、近世医家の漢学の素養に着目して医家が学術文化を下支えした近世日本文化の一端を紹介した。概して16～17世紀前半には医家による漢詩文の創作例は少なく、17世紀後半～18世紀になると後世・古方を問わず漢詩文の作例が増加し、19世紀には漢・蘭を問わず個人の漢詩文集を編纂する医家も現れる。ここに16～19世紀日本における漢学文化浸透の軌跡を見ることは容易である。この状況は1850～60年代に生まれて1870年前後に藩校で初中等教育を受けた世代まで続き、アカデミズム揺籃期の第一世代に属する医学者には漢詩文を自己表現の手段とする者が散見される。まさにその世代に属する富士川游・呉秀三・土肥慶蔵・藤浪剛一・入澤達吉ら本学会の創設期メンバーも概ねこれに該当し、その足跡は研究方法や収集資料を含めて日本医史学研究のあり方と不可分な影響を及ぼしている。

したがって、各時代の医家・医学者が研鑽した学と術は勿論それ自体に医史学研究上の意義を持つものであるが、同時に彼らが身に着けた素養や専門領域外の営為もまた「医療と文化」といった枠で見れば、医史学の対象、或いは文化史の対象となり得るのではないかと考えた。

そこで、本学会前後の時期に、学会会場の二松学舎大学に加えて、大阪道修町の武田科学振興財団杏雨書屋と東京駒込の東洋文庫において記念展示を企画した。杏雨書屋では「医家の詩文と書画 その二」と題して江戸後期の医家の学芸文化を紹介している。東洋文庫では善本漢籍や浮世絵類などにより、医学における異文化接触を紹介している。二松学舎大学では上記の本学会創設期メンバーを含む明治以降の医家の資料から文化的継承の一端を紹介している。これらの展示や本シンポジウムを通して、医学史を文化史と関連させつつ、手触りのあるモノによって具体的に示し、会員各位のみならず一般の関心をも喚起する機会としたい。二つの副題は、「文化的継承」が医家の日本文化史に果たした意義に焦点を当てたい、「異文化理解」が東アジアの伝統的医療文化を再発見する機会としたい、との考えからである。

次に各報告者について簡単にその研究領域を中心に紹介しておこう。

丸山裕美子氏は、日本古代史の研究者であり、特に日本古代の医学と医療、東アジアの本草文化、日唐医疾令の比較研究などの分野で当該領域を牽引する研究業績を挙げている。近著に武倩氏と共編著になる『本草和名一影印・翻刻と研究一』（2021 汲古書院）等がある。今回は遣唐使からみる唐と古代日本の医療と文化をテーマとしてご報告いただく。

岩間眞知子氏は、美術史・茶道文化史の分野で多くの業績を挙げている研究者で、医薬史分野では茶との関わりから本草や喫茶養生について研究成果を発表している。今回はお茶からみる東アジアの医療と文化をテーマとしてご報告いただく。

稲松孝思氏は東京都健康長寿医療センターに長く医師として勤務され、医学分野では同センターの前身東京養育院（1872年創設）の初代院長である渋沢栄一の福祉事業に関して研究されている。今回は渋沢栄一の医療と文化に対する貢献をテーマとしてご報告いただく。